

二〇二五年度 田園調布学園大学

全学部全学科専攻 共通

# 国語 入学試験問題

一般選抜（個別試験型）A日程

受験番号				

（注意）

- 一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
- 二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
- 三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
- 四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてかまいません。
- 五、試験時間は六〇分です。

氏名

(一) 次のⅠとⅡを読んで、後の問いに答えなさい(本文は、原文の表記を改めたところがある)。

Ⅰ

私はかねてから神話、伝説、昔話の類を好む。中でも神話というのはどこの国のものも面白いが、やはり子供の頃から馴染深いのは日本の神話だから、その関連において他の国の神話にも興味があるとと言えるだろう。と申しても、決して比較神話学などという難しい学問とは関係がない。だいたい①神話が好きだなどと公言するのは、いささか子供っぽい気がしないでもなく、私のよ

うに学問や研究とは無縁の立場に立っていると、精神が脆弱な<sup>注1</sup>証拠かと人に疑われるかもしれない。かつて神話を歴史と間違えてむやみとこれを信仰した連中は、当然脆弱な精神を持っていたに違いないが、しかし神話が好きだから子供っぽいと、めったにきめることはできないようである。子供がこうした昔話に惹き入れられるのは、話の内容に含まれている超自然的な②荒唐無稽さとか非論理的な飛躍とかに我を忘れるためだろうから、大人の読者の興味の持ちかたとはおのずから別である。

A はなかなか我を忘れることはできない。子供は神話なり伝説なりを聞いたり読んだりしている時に、その話のただ中に自分を置く。大人のように外からそれを見ているわけではない。従って大人の読者は、専門家でなくても、神話にはその国民性もしくは民族性の、伝説にはその地域性もしくは風土性の、③最大公約数的な特徴を、必ずや発見するものである。いわばそこに、ある共通社会に働いていた想像力の源泉を見ることができると。B の想像力のaサンブツである神話は、長い時間をかけて煮つまったものだから、現代人には容易に解釈のつかない部分をも含んでいる。さまざまの矛盾撞着<sup>注2</sup>さえある。しかしその理詰めで行かないところが、合理主義に馴らされた我々の眼には、反対に面白いと言うことができよう。

従って神話に対して、C の合理主義的な考察を押し及ぼして、これを解釈するという傾向が生じる。例えば八俣の大蛇<sup>注3</sup>とは、河川の氾濫によって毎年のように農民が災害を受けていたことの象徴だとする。それを須佐之男命が治水工事をb施して稲のみのる美田に変えたというのである。しかし別の解釈も成り立つだろう。つまり単純に、八人の首領を持った盗賊の群を英雄が平定したというのである。こういう解釈をあれこれ空想することは愉しいが、やはり神話は神話として、最も初心の読みかた、言い換えればD の眼で、八つの頭と八つの尾を持ち、苔むした胴体をくねらせている大蛇を思い浮べながら読むのでなければ、④神話の本質に触れることはできないだろうと思う。古代人の想像力を追体験しようとするのでなければ、神話は学問の単なる材料として、乾からびた標本になってしまう。

現代人から見て、このような古代人の想像力がいかにも非現実的に見えるのは、物語が決定的な形を持つまでに、物凄く長い時間が経過しているからである。いわばそれはある地域の集合的な想像力を、E という鈍によって枝葉を削り取った残りの幹のようなものである。もとの樹

木の姿は見るべくもない。勿論神話が決定的な形を採るようになる時に、特定の個人が内容を変更した、もしくはcシユシヤ選択したということはあり得るだろう。「古事記」や「日本書紀」はその完成した結果であるだろう。しかしそれまでに、つまり伝承の時代において、一つの事実が

次第に伝説と化し神話と化して行く間に、総合的な想像力は、自分たちの好みのパターンの中に話を引き入れようとしただろう。必ずしも意識的に作為を施したのではなく、彼等の自然の感情として、その方がより真実だと思い込んだに違いない。

(福永武彦「古代人の想像力」より)

著作権の都合上、省略

## 著作権の都合上、省略

注

- 1 身体や組織などがもろくて弱いこと。
- 2 論理的に食い違って、つじつまが合わないこと。
- 3 日本神話に登場する、頭と尾が八つずつある、大酒飲みの巨大な蛇を、スサノオノミコトが退治して、クシナダヒメを救った話。八岐大蛇とも書く。
- 4 オイディプスは父を殺し、母を妻とする宿命に縛られた王、プロメーテウスはゼウス神から火を盗み罰せられた英雄のこと。
- 5 哲学者スピノザの言葉。「真の認識として」の意。

問一 二重傍線部 a と e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部②「荒唐無稽」、③「最大公約数的な」、⑥「だしに、使う」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 不思議で、神秘的  
イ はげしく、乱暴な  
ウ ふざけていなく、まじめ  
エ 内容もなく、ナンセンス  
オ とりとめがなく、でたらめ
- ② 荒唐無稽

③ 最大公約数的な

- ア 民衆への最大の約束となる
- イ 多くの人に知れ渡っている
- ウ 最も大きな類似点となる
- エ 最高に価値の高い
- オ 莫大な数の共通認識のある

⑥ だしに、使う

- ア 都合よく利用する
- イ しばらく借用する
- ウ うま味だけとる
- エ きっかけにする
- オ たとえに使用する

問三 傍線部①「神話が好きだななどと公言するのは、いささか子供っぽい気がしないでもなく」とあるが、なぜ「子供っぽい」のか、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 神話や伝説は、子供のように読み終えておくべき読み物だから。
- イ 神話を読むことが、比較神話学のような学問や研究と無縁のジャンルだから。
- ウ 歴史好きと同じように、神話好きなことをわざわざ公言するのは脆弱だから。
- エ 物語の中に身を置き、想像力に任せて無我夢中で神話を読むから。
- オ 神話は超自然的な話が多く、内容も非現実的なものだから。

問四 空欄A、B、C、Dに入る最も適当なことばを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい(同じことばは一度しか使えない)。

- ア 子供
- イ 大人
- ウ 個人
- エ 現代人
- オ 古代人

問五 傍線部④「神話の本質に触れること」とあるが、それはどのような読み方により可能か。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古代人の想像力を追体験しようとする読み方
- イ 合理主義的な考察を押し及ぼそうとする読み方
- ウ 学問的材料としようとする読み方
- エ 時間をさかのぼっていこうとする読み方
- オ 自然の感情として真実をくみ取ろうとする読み方



問十 次に示すのは、文章【一】と【二】を読んだ高校生が意見を述べたものである。本文の趣旨に基づいて述べているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 神話が好きな人を子どもっぽいと思ったことはなかったけれど、現代は神話の本質を忘れて表面的な使い方にばかり偏っているという点は共感した。人間生活のあり方を見直すためにも、多くの神話を読んでいくことが必要だと感じた。

イ どちらの文章にも八岐大蛇の話が出てきているね。それだけ歴史を大切にする日本人の心に響く話なんだということが理解できた。古代人の知恵を学ぶと同時に、現代の私たちの生活に生かせるところを生かしていくべきだと思う。

ウ 神話を読むときに一番大切なのは、物語の中に身を置くのではなく、外から見渡し、合理的に解釈していくことだと学べた。現代でも非合理的で無言の圧力のような理不尽な目にあうことがあるから、つねに本質を忘れないようにしたい。

エ 神話とのかかわり方は色々あるけれど、どちらの文章にも、容易に明らかにしがたいような出来事や話をないがしろにしない姿勢がある。そこには面白さはもちろん、人間生活の理念や人間の本質に迫るものがあるから、今でも大切なだね。

オ 神話が長い時間をかけて完成した話である以上、古代人が現代人かとか、子どもか大人かという区別はあまり重要ではないね。いつの時代でも、詩人や文学者、民衆のなかの知恵者たちによって、これからも残っていく神話が作られていくんだな。

(二) 次の文章は、岡本かの子の小説「越年」の一節である。

年末のボーナスを受け取った日、会社で加奈江は男性社員の堂島に突然平手打ちを食わされた。同僚の明子や磯子も憤慨し、翌日加奈江が課長に話しに行くと、堂島はすでに退職していた。堂島の行方もわからず、気持ち収まらない加奈江だったが、夜、銀座を歩けば堂島を捕まえられそうだということを知った。

以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

師走の風が銀座通りを行き交う人々の足もとから路面の薄埃うすぼこりを吹き上げて来て、思わず、あっ！ と眼や鼻をおおわせる夜であった。

加奈江は首にまいたスカーフを外注1套つかの中から掴み出して、絶えず眼鼻を塞ふさいで埃を防いだが、その隙に堂島とすれ違ってしまったえば、それっきりだという惧おそれで直ぐにスカーフをはずして前後左右を急いで観察する。今夜も明子に来て貰って銀座を新橋の方から表通りを歩いて裏通りへと廻って行った。

「十日も通うと少し飽き飽きして来るのねえ」

加奈江が **A** 感じたことを溜息と一緒に打ち明けたので、明子も自分からは差控えていたことを話した。

「私このごろ眼がまわるのよ。始終雑沓ざつせつする人の顔を一々覗のぞいて歩くでしょう。しまいには頭がぼーっとしてしまって、家へ帰って寝るとき天井が傾いて見えたりして吐気がするときもある」

「済みませんわね」

「いえ、そのうちに慣れると思うてる」

加奈江はまた暫しばらく黙もくってすれ違う人を注意して歩いていたが

「私、撲なぐられた当座、随分口惜しかったけれど、今では段々薄れて来て、毎夜のように無駄に身体を疲らして銀座を歩くことなんか何だか莫ば迦からしくなって来たの。殊とに事変じへん下げでね……。

それで行く人をして往かじめよって気持ちで、すれ違う人を見ないようにするのよ。するとその人が堂島じゃなかったかという気がかりになって振り返らないではられないのよ。何という因いん業ぎょうな事でしょう」

「あら、あんたがそんな **B** に陥おとっては駄目ね」

「でも頬一つ叩いたぐらい大したことでないかも知れないし、こんなことの復讐ふせうなんか女にふさわしくないような気がして」

「まあ、それあんたの本心」

「いいえ、そうも考えたり、いろいろよ。社ではまだかまだかと訊くしね」

「①それじゃ私が一番お莫迦さんになるわけじゃないの」

明子は顔を **C** にして加奈江に言いかけたが、堂島に似た青年が一人明子の傍をすれ違ったので周章あわててその方に顔を振り向けると、青年は立止まつて

「何ていう顔をするんですか」と冷笑したので明子はすっかり赤く照れて顔を伏せてしまった。

青年はうるさくついて来た。加奈江と明子はもう堂島探しどころではなかった。二人は **D** 南へ歩いて銀座七丁目の横丁まで来た。その時駐車場の後端の方に在った一台のタクシーが動き出した。その中の乗客の横顔が二人の眼をひかないではなかった。どうも堂島らしかった。二人は泳ぐように手を前へ出してその車の後を追ったが、バックグラスに透けて見えたのは僅わずかに乗客のソフト帽注3 だけだった。

それから二人は再び堂島探しに望みをつないで暮れの銀座の夜を縫って歩いた。事変下の緊縮した歳暮はそれだけに成るべく無駄を省いて、より効果的にしようとする人々の切羽詰まったような気分が街に籠こもって、銀ブラ注4 する人も、裏街を飲んで歩く青年たちにも、こつんとした感じが加わった。それらの人を分けて堂島を探す加奈江と明子は反撥はんぱつのようなものを心身に受けて余計に疲れを感じた。

「歳の瀬の忙しいとき夜ぐらいは家にいて手伝って呉くれてもいいのに」

加奈江の母親も明子の母親も愚痴こぼを滾こぼした。

加奈江も明子も、まだあの事件を母親に打ちあけてないことを今更、気づいた。しかしその復讐のために堂島を探して銀座に出るなどと話したら、直ただちに足止めを食うに決まっている——加奈江も明子も口に出さなかった。その代り「年内と言っても後四日、その間だけ我慢して家にいましょう」二人は致し方のないことだと諦めて新年を迎える家の準備にいそしんだ。来るべき新年は堂島を見つけて出来るだけの仕返しをしてやる——そういう覚悟が別に加わって近ごろになく気持ちが張り続けていた。

いよいよ正月になって加奈江は明子の来訪を待っていた。三日の晩になっても明子は来なかった。加奈江は自分の事件だから本当は自分の方から誘いに出向くべきであったと始めて気づいて独りで苦笑した。今まで加奈江は明子と一緒に銀座の人ごみの中で堂島を掴まえるのには和服では足手まといだというので、いつも出勤時の灰色の洋服の上に紺の外套をお揃いで着て出たものだったが、②流石さすがに新年でもあり、まだ二三回しか訪れたことのない明子の家へ行くのだから、

加奈江は a ニュウネンにお化粧して、女学校卒業以来二年間、余り手も通さなかった裾模様の着物を着て金模様のある帯を胸高に締めた。着なれない和服の盛装と、一旦途切れて気がゆるんだ

後の冒険の期待とに妙に興奮して息苦しかった。羅紗（注5）地のコートを着ると麻布の家を出た。外は一月にしては珍らしくほの暖かい晩であった。

青山の明子の家に着くと、明子も急いで和服の盛装に着替えて銀座行きのバスに乗った。

「わたし、正月早々からあんたを急せぎ立てるのはどうかと思つて差控えてたのよ。それに松の内は銀座は早仕舞いで酒飲みなんかあまり出掛けないと思つたもんだから」

明子は言い訳をした。

「わたしもそうよ。正月早々からあんたをこんなことに引張り出すなんか、いけないと思つたの。でもね、正月だし、たまにはそんな気持ちばかりでなく銀座を散歩したいと思つて、それで裾模様で来たわけさ。今日はゆったりした気持ちで歩いて、スエヒロかオリンピック（注6）で厚いビフテキでも食べない」

加奈江は家を出たときとは**イクブン**心構えが變つていた。

「まあまあそれもいいねえ。裾模様にビフテキは少しあわないけれど」

「ほほほほ」

二人は晴やかに笑つた。

銀座通りは既に店を閉めているところもあつた。人通りも割合に少なくて歩きよかつた。それに夜店が出ていないので、向う側の行人まで見通せた。加奈江たちは先ず尾張町から歩き出したが、瞬またく間に銀座七丁目の橋のところまで来てしまった。拍子抜けのした気持ちだつた。

「どうしましょう。向う側へ渡つて京橋の方へ行ってオリンピックへ入りましょうか、それともこの西側の裏通りを、別に堂島なんか探すわけじゃないけれど、さつさと歩いてスエヒロの方へ行きますか」

加奈江は明子と相談した。

「そうね、何だか癖がついて西側の裏通りを歩いた方が、自然のような気がするんじゃない」

明子が言い終らぬうちに、二人はもう西側に折れて進んでいた。

「そら、あそこよ。暮に堂島らしい男がタクシーに乗つたところは」

明子が思い出して指さした。二人は今までの澄ました顔を忽たちまちに蔽かくした。それから縦の裏通りを尾張町の方に向つて引返し始めたが、いつの間にか二人の眼は油断なく左右に注がれ、足の踏まえ方にも力が入っていた。

資生堂の横丁と交叉する辻角に来たとき五人の酔つた一群が肩を一列に組んで近くのカフェから出て来た。そしてぐるりと半回転するようにして加奈江たちの前をゆれて肩をこすり合いながら歩いて行く。

「ちよいと！ 堂島じゃない、あの右から二番目」

明子がかすれた声で加奈江の腕をつかんで注意したとき、加奈江は既に獲物に迫る意気込みで、明子そのまま引きずって、男たちの後を追いかけた。——どうかこの一列の肩がほぐれて、堂島一人になればよいが——と加奈江はあせりにあせつた。それに堂島が自分達を見つけて知っ

ているかどうかも知りたかった。そう思つて堂島の後姿を見ると特に目立って額を俯向うつむけているのも怪しかった。二人は半丁注こももE注こもして後をつけた。そのとき不意に堂島は後を振り返つた。

「堂島さん！ ちょっと話があります。待つて下さい」

加奈江はすかさず堂島の外套の背を握りしめて後へ引いた。明子もその上から更に外套を握つて足を踏張った。堂島は周章でて顔を元に戻したが、女二人のc渾身の力で喰い止められてそれのまま通のがれることは出来なかった。五人の一行は堂島を底にしてV字型に折れた。

「よー、こりや素敵、堂島君は大変な女殺しだね」

同僚らしいあとの四人は肩組も解ほどいてしまつて、呆れて物珍らしい顔つきで加奈江たちを取巻いた。

「いや、何でも無いよ。一寸失敬する」

そういつて堂島は加奈江たちに外套の背を掴まれたまま、連れを離れて西の横丁へ曲つて行つた。小さな印刷所らしい構えの横の、人通りのないところまで来ると堂島は立止まった。離して逃げられでもしたらと用心して確しかり握りしめてついで来た加奈江は、必死に手に力をこめるほど往時むかしの恨みが衝つき上げて来て、今はすさまじい気持ちになつていた。

「なぜ、私を撲つたんですか。一寸口を利かなかつたぐらいで撲る法がありますか。それも社を辞める時をよつて撲るなんて卑怯じゃありませんか」

加奈江は涙が流れて堂島の顔も見えないほどだった。張りつめていた復讐心が既に融け始めて、あれ以来の自分の惨めな毎日が涙の中に浮び上つた。

「本当よ、私たちそんな無法な目にあつて、そのまま泣き寝入りなんか出来ないわ。課長も訴えてやれつて言つてた。山岸さんなんかも許さないつて言つてた。さあ、どうするんです」

堂島は不思議と神妙に立っているきりだった。明子は加奈江の肩を頻しきりに押して、叩き返せと急きたてた。しかし女学校在学中でも友達と口争いはしたけれども、手を出すようなことの一度だつてなかった加奈江には、いよいよとなつて勢いよく手を上げて男の顔を撲るなぞということはなかなか出来ない仕業だった。

「あんまりじゃありませんか、あんまりじゃありませんか」

そういう鬱憤の言葉を繰返し繰返し言い募ることによつて、加奈江は激情を弾ませて行つて「あなたが撲つたから、私も撲り返してあげる。そうしなければ私、気が済まないのよ」

③加奈江は、やつと男の頬を叩いた。その叩いたことで男の顔がどんなにゆがんだか鼻血が出はしなかったかと早や心配になり出す彼女だった。叩いた自分の掌に男の脂汗が淡くくつついたのを敏感に感じながら、加奈江は一步後退しきつた。

「もっと、うんと撲りなさいよ。④利息つてもものがあるわけよ」

明子が傍から加奈江をけしかけたけれど、加奈江は二度と叩く勇気がなかった。

「おいおい、こんな隅っこへ連れ込んでるのか」

さっきの四人連れが後から様子を覗きにやってくる。加奈江は独りでさっさと数寄屋橋の方へ駆けるように離れて行った。明子が後から追いついて

「もつとやっつけてやればよかったのに」

と、自分の毎日共に苦労した分までも撲って貰いたかった不満を交せて残念がった。

「でも、私、お釣銭は取らないつもりよ。後くされが残るといけないから。あれで私気が晴々した。今こそあなたの協力で本当に感謝しますわ」

改まった口調で加奈江が頭を下げてみせたので明子も段々気がほぐれて行って「お目出とう」と言った。その言葉で加奈江は

「そうだった、ビフテキを食べるんだったつけね。祝盃を挙げましょうよ。今日は私のおごりよ」  
二人はスエヒロに向った。

六日から社が始まった。明子から磯子へ、磯子から男の社員達に、加奈江の復讐成就が言い伝えられると、社員たちはまだ正月の興奮の残りを沸き立たして、痛快痛快と叫びながら整理室の方へ押し寄せて来た。

「おいおい、みんなどうしたんだい」

一足後れて出勤した課長は、この光景に不機嫌な顔をして叱ったが、内情を聞くに及んで愉快そうに笑いながら、社員を押し分けて自分が加奈江の卓に近寄り「よくdカンテツしたね、あたらち

ほんかい本懐じゃ」と祝った。

加奈江は一同に盛んに賞讃されたけれど、堂島を叩き返したあの瞬間だけの強いて自分を弾ませたときのF気分はもうとくに消え失せてしまって、今では却ってみんなからやいやい言われるのがかえって自分が女らしくない奴と罵られるように嫌だった。

社が退ひけて家に帰ると、ぼんやりして夜を過ごした。銀座へ出かける目標めあても気乗りもなかった。

勿論、明子はもう誘いに来なかった。戸外は相変わらず不思議に暖かくて雪の代りに雨がGと

降り続いた。加奈江は茶の間の隅に坐って前の坪庭せきざんかの山茶花の樹に雨が降りそそぐのをすかし見ながら、むかしの仇討ちをした人々の後半生というものはどんなものだろうなどと考えたりした。そして自分の詰らぬ仕返しなんかと較べたりする自分を莫迦になったのじゃないかとさえ思うこともあった。

一月十日、加奈江宛の手紙が社へ来ていた。加奈江が出勤すると給仕むせが持って来た。手紙の表には「ある男より」と書いてあるだけで加奈江が不審に思っけて開いてみると意外にも堂島からであった。

この手紙は今までの事柄の返事のもりで書きます。僕は自分で言うのもおかしいけれど、はつきりしていると思う。現在、あの拓殖会社（注）が煮え切らぬ存在で、今度の社が軍需に専念である点が僕の⑤去就を決した。しかし私に割り切れないものがあの社を去るに当って一つあ

った。それは貴女に対する私の気持でした。社を辞めるとなれば殆ど貴女には逢えなくなる。その前に僕の気持を打ち明けて、どうか同情して貰いたいとあせった。しかし僕は令嬢というものに対してはどうしても感情的なことが言い出せない性質です。だから遂々ボーナスを貰って社を辞めようとした最後の日まで来てしまったのです。いよいよ、言うことすら出来ないのか。思い切って打ち明けたところで、断られたらどうということになる。此方は **H** と思いを残して引下り貴女は僕のことなぞ忘れてしまっただけだ。いっそ喧嘩でもしたらどうか。或いは憎むことよって僕を長く忘れないかも知れない。僕もきっかり決裂した感じで気持をそらすことが出来よう。⑥そんな自分勝手な考えしか切羽詰って来ると浮びませんでした。⑦とつおいつ、僕は遂に夢中になって貴女をあの日、撲ったのでした。しかし、女を、しかも一旦慕った麗人を乱暴にも撲ったということは僕のヒューマニズムが許しませんでした。いつも苦い悪汗となって胸に浸み渡るのでした。その不快さに一刻も早く手紙を出して詫びようと思ったが、それも矢張り自分だけを救うエゴイズムになるのでやめてしまったのです。先日、銀座で貴女に撲り返されたとき、これで貴女の気が晴れるだろうから、そこでやっと自分の言い訳やら詫びをしようと、**I** していたのですが、連れの者が邪魔して、それを果しませんでした。よって手紙を以って、今、釈明する次第です。平にお許し下さい。

堂島 潔

としてあった。加奈江は、そんなにも迫った男の感情であるものかしらん、今にも堂島の荒々しい熱情が自分の身体に襲いかかって来るような気がした。

加奈江は時を二回分けて、彼の手、自分の手で夢中になってお互いを叩きあつた堂島と、このまま別れてしまうのは少し無慙な思いがあつた。一度、会って打ち解けられたら……。

加奈江は堂島の手紙を明子たちに見せなかった。家に帰るとその晩一人銀座へ向つた。次の晩も、その次の晩も、十時過ぎまで銀座の表通りから裏街へ二回も廻って歩いた。しかし堂島は遂に姿を見せないで、路上にはe漸く一月の本性の寒風が吹き募つて来た。

注

- 1 オーバーコートのこと。
- 2 宣戦布告なしで行われる国家間の武力紛争。
- 3 頂の中央が縦にくぼんだつばのある、フェルトなどで作った柔らかい感じの男性用の帽子。
- 4 銀座通りをぶらぶら散歩すること。
- 5 羊毛で地の厚く密な毛織物。
- 6 どちらも洋食レストラン。
- 7 丁(町)は距離の単位。一丁は約一〇九メートル。
- 8 役所や会社で、細かい雑用をした人。
- 9 開拓および植民を事業とする会社。

問一 二重傍線部 a と e について、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二 傍線部②「流石に」、⑤「去就を決した」、⑦「とつおいつ」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア かえって

イ だからこそ

② 流石に  
ウ それにもまして

エ 思った通り

オ いくらなんでも

ア 身の処し方を決めた

イ 決心を固めた

⑤ 去就を決した  
ウ 人生の選択をさせた

エ 辞職を決めた

オ 転職を決めた

ア 自暴自棄になって

イ あれこれ迷って

⑦ とつおいつ  
ウ 次々考えが浮かんで

エ 次第に考えが定まって

オ 訳が分からなくなって

問三 空欄 A・C・D・E・G・H・I に入る最も適当な表現を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しょぼしょぼ      イ もじもじ      ウ ずんずん      エ すごすご

オ くしゃくしゃ      カ つくづく      キ じりじり

問四 空欄 B に入る最も適当なことばを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア カオス

イ カタルシス

ウ ジレンマ

エ モノローグ

オ ニヒリズム

問五 傍線部①「それじゃ私が一番お莫迦さんになるわけじゃないの」とあるが、この表現には明子のどのような気持ちが含まれているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 撲られた当事者の加奈江が、堂島を探して歩いているにもかかわらず、すれ違う人を見ないようになっているのなら、眼がまわるのに必死に人の顔を覗いて歩く自分はやり切れないという気持ち。

イ 撲られた当事者の加奈江が、堂島への口惜しさが薄れ、女らしさを気にするようになってきたのなら、復讐を手助けしようとする自分は執念深く、女らしさに欠ける者になるのではないかと恥じる気持ち。

ウ 撲られた当事者の加奈江が、復讐のために堂島を探して歩くことに疲れ、無駄だと思ってきたのなら、具合が悪くなっても加奈江のために歩こうとする自分は情けないと悲観する気持ち。

エ 撲られた当事者の加奈江が、復讐のために堂島を探して歩くことを無意味だと思ってきたのなら、それに付き合っ歩いて歩く自分は加奈江以上に愚かではないかと自嘲する気持ち。

オ 撲られた当事者の加奈江が、撲られたことは大したことではなく、復讐はよくないと思ってきたのなら、復讐を勧めてきた自分は加奈江より冷酷になるのではないかと憤慨する気持ち。

問六 傍線部③「加奈江は、やっと男の頬を叩いた」とあるが、なぜ「やっと」なのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女学校育ちの令嬢である加奈江には、堂島を撲る勇気がなかなか出なかったが、撲られてからの惨めな日々を思い出し、共に探し歩いてくれた明子に急ぎ立てられたため、ようやく堂島を撲ったから。

イ 明子に急かされても、人を撲ったことのない加奈江には堂島を撲ることがなかなか出来ずにはいたが、心の中におさえていた恨みや怒りを口に出すことで気持ちを高ぶらせ、その勢いで堂島を撲ったから。

ウ 明子にけしかけられても、人を撲ったことのない加奈江には堂島を撲る決心がつかずにはいたが、胸の内におさえていた恨みが衝き上げてきて、思わずそれを口に出したことで気持ちが高揚し、勢い余って堂島を撲ったから。

エ すでに張りつめていた復讐心は溶け始めてしまい、加奈江には堂島を撲る気力を失いかけていたが、明子に急ぎ立てられ、積もりに積もった悔しさと悲しさを口に出すことで自分を鼓舞し、なんとか堂島を撲ったから。

オ 明子に催促されても、女らしさを気にする加奈江には男の堂島を撲ることに踏ん切りがつかずにいたが、かつての恨みがこみ上げてきて、撲られたから撲るのは正当だと言えたことで、ようやく堂島を撲ったから。

問七 傍線部④「利息つてものがあるわけよ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 堂島を探し歩いた苦労の分だけ、撲る量が増えてよいということ

イ 男性から女性が撲られたことを考えると、もっと強く撲るべきだということ

ウ 堂島に撲られてから経った時間の分だけ、撲るべき量が増えたということ

エ 堂島に撲られて味わった悔しさは、一度撲るだけでは足りないということ

オ 共に探し歩いた明子の苦労もあるのだから、二度撲るべきだということ

問八 空欄Fに入る最も適当な表現を、本文中から抜き出し、四字で書きなさい。



(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えな  
れ。

- ① 会社の面接で将来の（ ）について聞かれた。  
ア オプション      イ シミュレーション      ウ ポイント      エ ビジョン
- ② 国連は世界に向けて地球温暖化の警鐘を（ ）いる。  
ア 打って      イ 叩いて      ウ 鳴らして      エ 響かせて
- ③ 母は弟に噛んで（ ）ように、なぜいけないのか説明した。  
ア うながす      イ 飲み込む      ウ 広がる      エ 含める
- ④ （ ）正しい人柄が職場でも評価されている。  
ア おり目      イ きれ目      ウ さかい目      エ われ目
- ⑤ 人間は結局、自然の（ ）に従うしかない。  
ア 指導      イ 摂理      ウ 是非      エ 暴挙
- ⑥ プラネタリウムで（ ）あふれる星空の世界を体験した。  
ア 安心感      イ 色彩感      ウ 立体感      エ 臨場感
- ⑦ 犯人不明のまま事件は（ ）となり、捜査本部も解散した。  
ア お宮参り      イ 神隠し      ウ 迷宮入り      エ 雲隠れ
- ⑧ 冒頭のエピソードがこの物語の（ ）となっていることに気付いた。  
ア 受け皿      イ 演出      ウ 根回し      エ 伏線
- ⑨ 医学の話は（ ）だから私にはよくわからないわ。  
ア 第三者      イ 仏頂面      ウ 村八分      エ 門外漢
- ⑩ 「もう帰ろう」と言うと、幼い弟は（ ）「いやだ」と言った。  
ア 石橋をたたいて      イ かぶりを振って      ウ さじを投げて      エ 手を回して